

環境生態学科のこの一年

小泉 尚嗣
環境生態学科長

環境生態学科では4月に35人の入学者を迎えた。2年生と3年生は共に30名である。4年生以上の33名の内、31名が卒業し2名は残念ながら退学した。新型コロナ感染症が流行して景気が低迷する中、就職環境は例年に比べて厳しかったが、卒業生の中の就職希望者が全員就職できたのは学科長として喜びである。

この1年は、新型コロナウイルス感染症の流行に振り回された。前期授業は、開始が遅れた上に、ほとんどの講義が遠隔講義となった。学生も教員も初めての経験で手探り状態での講義の実施であった。本学および本学科の特徴でもある、野外での対面での実験・講義や調査を、学生に経験させてやれなかったのは非常に残念であった。幸い、後期においては、対面授業を当初はやることができた。しかし、それも1月に入って、首都圏や関西圏等に緊急事態宣言が出されたため遠隔講義に切り替えとなった。卒業研究における指導も、パソコン等の画面を通じた遠隔の指導が多くなり、実験や調査におけるコツを含めた注意事項を伝えるのに苦労した。学生も指導する教員も、もどかしい思いを何度も味わったと思う。そういう状況にも関わらず、4年間の学生生活の締めくくりともいえる卒業論文発表会の内容は、例年に勝るとも劣らないものであった。逆境を乗り越えた卒業生たち、および指導した教員たちを誇りに思う。

新型コロナウイルス感染症は学生生活を変えた。「三密」を避けるため、多人数による宴会は避けるべきこととなり、学生食堂には、1席毎に仕切りが設けられ、「黙食（だまって食べること）」が推奨された。部・サークル活動も大きく制限された。私自身も、食堂で食事をしながら学生たちと会話するのが密かな楽しみであったがそれができなくなった。約40年前になる自身の学生生活を思い返すと、食堂やコンパ（宴会）や下宿先の狭い部屋での友人同士との会が、大きな楽しみでありストレス発散であり、

人格の形成や学業への向上心につながっていたと思う。新型コロナウイルス感染症対策の名の下に、その機会を奪ってしまったことに忸怩たる思いがある。もちろん、今の学生たちには、SNS等、私の学生時代にはなかった新たな意思疎通（コミュニケーション）の手段がある。しかし、対面して相手や場の様子を感じながらの会話以上に、効率的な意思疎通の手段はない筈であり、その機会を奪ってしまったことは問題だろう。「ポストコロナ」という何となく耳障りのよい言葉の下で、引き続きその機会を無批判に奪い続けることがあるとすれば、それはよろしくないと考える。就職する場合はもちろん、進学する場合においても、意思疎通の能力は必要とされるからである。

1995年の開学以来、長く本学科の琵琶湖における調査研究に使われてきた調査実習船「はっさか」（全長12.6m、定員18名）が耐用年数に達し、新しい船（全長15m、定員24名）が来年度から本格運用される。名前を公募した結果、「はっさかⅡ（にせい）」となった。「はっさかⅡ」は大きくなり安全性も増した。結果として、今までの「はっさか」では、風速5m/s以下でないと出航できなかつたのが、「はっさかⅡ」では、風速5m/sを越えて7m/s程度までなら出航できる見込みである。遮る物のない琵琶湖の上では、風速5m/sとなることはよくあり、快晴なのに航出できないことがよくあった。収容人数が増えたこともあり、「はっさかⅡ」によって、より効率的に教育・研究が行えることになることを確信している。

教員組織と教育組織を分離する「教・教分離」が、2020年度におけるいくつかの準備作業を経て、当初計画（滋賀県立大学第3期中期計画）から1年遅れで2021年度から始まる。大学における学部-学科といった教育組織と一体となっている教員を、別の組織（滋賀県立大学では「〇〇研究院」）に所属させる形を取ること、教員の身分に配慮する必要なく、社会・時代の要求に合った教育組織（大学組織）の改革を行おうとするのが「教・教分離」の目的であると私は理解している。いずれ行われるであろう滋賀県立大学の改革が、学生および教職員に

とってよいものとなるように私としても努力していきたい。

環境政策・計画学科のこの一年

上河原 献二
環境政策・計画学科長

2020年度は、コロナ禍対応に追われた一年であった。

環境政策計画学科では4月に39人の入学者を迎えた。しかし、4月7日に予定されていた入学式は中止となった。授業の開始は、一旦、4月22日に延期され、さらにその後、緊急事態宣言が発出されるなどしたことから、5月11日に再度延期された。その間、学生たちは自宅待機となった。それを受けて、「生きている・できる・ありがとう」と題した新生・在学へへの学科長からのメッセージを、オンラインで公開した (<https://depp-usp.com/archives/5131>)。人影の少なくなった学内では、私の研究室の前の草地でタヌキが昼寝するという珍事も起きた(4月17日)。

その間、学科では、遠隔授業開始に備えて、全ての学生の自宅での情報機器・回線環境の個別確認を行った。そして、いよいよ5月11日から、遠隔授業が始まった。突然のオンライン化によって、私は21世紀版「文明開化」の世界に放り出されたように感じられた。大学情報システム上にオンデマンドの授業資料をアップロードし、毎授業毎に課題提出・回収を繰り返しながら、少人数クラスは、会議ソフトで行うこととなった。学科では、遠隔授業期間中の学生の状況を把握するため、アンケート調査を月に一回行った。学生の方でも、遠隔授業に伴う個別授業ごとの課題提出に追われて大変だったようであった。また通学が無くなったことが大きな要因と思われるが、昼夜逆転してしまったという学生も複数いた。毎日繰り返される通学が学生の体調管理に大きな役割を果たしていることを改めて認識した。

なお、月例の学科会議は、感染防止策を取り、開催場所を従来と比べはるかに広い演習室に移して、基本的に対面で続けることができた。オンライン化の趨勢に合わせて、年度途中から、会議資料はオンラインで提出・保管することに決まり、会議のペーパーレスが実現した。

例年開催されている5月と9月の卒業研究中間発表会は、オンラインで行われた。パソコン等の画面を見ながらの発表・試聴・意見交換には、対面以上の集中力を要するため、4回生・教員を二つのグループに分けて、実施した。それぞれのグループの発表会を録画して、自分の参加しなかったグループの発表を後で見られるようにした。学生たちのオンライン技術の習熟は早く、基本的には円滑に行われた。他方、二つのグループに分けたために、コメントできる教員の数を実質的に減少するとの影響もあった。

オープンキャンパスは、全学でオンライン対応となったが、当学科でも、学科ホームページ上の特設コーナーを8月31日から公開し、学科・学生紹介ビデオの提供、教員・卒業研究紹介を行った。学科・学生紹介のビデオは、学生たちが作成したが、高水準のものとなった。

(<https://depp-usp.com/archives/5299>)。

後期から授業をほぼ対面で行えるようになったので、ほっとした。大都市圏等では、キャンパス閉鎖が一年間続いた大学も多かったことと比べると、幸いであった。ただし、感染予防に注意しなければならず、少人数クラスは、Zoom等遠隔の双方向授業で行う場合が多かったと思う。例年であれば、私は少人数クラスではお茶を入れて、くつろいでもらいながら学生たちと議論していた。しかし本年度は、それができなかったことは残念であった。

コロナ禍の影響は、卒業研究にも及んだ。従来であれば現場を訪れて関係者に面談する機会が多いが、2021年度は、コロナ禍のため、面談を電話インタビュー等に変えざるを得なかった場合も多かった。また、調査対象によっては、コロナ禍の影響を強く受けた業種・現場もあったため、研究計画を一部見直さざるをえない学